

## 氷の化石 天からの暗号

雪まつりの札幌に久しぶりの大雪が降って、汚れた街角を新雪の純白で化粧直しをしてくれた。降る雪にそっと手袋をさしだすと、霰に混じって思いのほか大きな六華の結晶が手の上でキラキラと輝いていた。

雪の結晶は、天から送られた手紙、そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれている』のまさに言葉どおり十分に成長した六華の樹枝状の結晶は上空の水の豊富さを物語ってくれる。

六角形も紋用が繊細に刻み込まれている六角板の薄い結晶、水晶以上に水晶らしい六角柱、その六角柱の両端に六華の結晶が成長した鼓（つづみ）型、そして低温の時にできる極微の針状や砲弾型の結晶といった具合に様々な姿で空からの情報を伝えてくれている。

上空の雪が融けて降れば雨となり、融けかけがミゾレとなる。雨と雪では大違いで雪は結晶という精緻な表情があるが、融けた途端

に表情が消えてしまう。雨は流れて消えるが雪は融けない限り残る。南極やグリーンランドのような極地で降れば、融けずに雪が降り積りやがて変じて氷となる。その時代の澄んだ空気も汚れた空気も火山灰も正直に閉じ込めて、その時代を記憶してしまう氷の化石となる。雪のものは水、水は酸素を含み同位元素の違いという暗号からその時代の気温も一緒に記憶する。

かくして南極などの雪から変じた氷の化石にはすでに数十万年前からの空気と気温の記憶が閉じ込められている。降る雪はその当時の地球環境を暗号で書き残した天からの手紙」となる。年々積み重なる雪の手紙は掘り起こされて白日にさらされない限り、その時代の秘かな暗号で書いた古い手紙となつて氷の大陸の奥深いところで眠りについている。

気象庁 村松 照男